

風呂の短編集

風呂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『即興小説トレーニング』（大体制限時間一時間）で書いたものや、そうでないものを気が向くままに投下する予定。

目次

先輩の演技力について	1
投身日和	3
超能力少年、受難の始まり	9
彼女の平常運転(仮)	11

先輩の演技力について

例えば、だ。

例えばテレビドラマの撮影現場に出くわしたとしよう。

いつもテレビや映画、もしくは舞台等で見るベテランや若手俳優がそれぞれの演技をしている。

別に性別や年齢は関係ない。好きな人達を想像すると良い。

勿論彼ら彼女らはその物語の登場人物そのままのキャラクターではなく、それぞれ素の自分というものがある。

だから演じる役柄に得意不得意があつて当然で、演じる事が仕事なのだからそうなりきれよう、努力するのが普通である。

で、あるならば、目の前の光景は演技なのかどうなのか。

「へえ、それでどうしたんです?」

「ワンパンよ、ワンパン。それで惨めに泣いてやんの!」

知り合いというか、大変お世話になつた先輩が、明らかに小物臭漂ういかにもチンピラですという風体の男と、とても楽しそうに会話しながら歩いていた。

——ああ、これは間違いなく演技だ。

その証拠に、時々肩が震えている。

あれは笑う時の震えではなく、怒りに震えているものだろう。

そもそも先輩はあんな男と付き合うような性格ではないし、初恋で酷い結末を迎えたとかで暫く恋愛はこりごりだとも言っていた。

そんな彼女があんな男と仲良くお喋りに興じているなんて、きっとあの男は悪人なんだろうなと確信する。

先輩は、最初に出会った時から既に色々トラブルに関わっては快刀乱麻の如く解決するという、何の漫画だと言いたくなるような事を続けている。

どうせ今回も、男に騙されたか傷つけられたかした人の頼みで、天誅を下しに来たのだろう。いつも通りと言えばいつも通りである。

しかし、いつもは「クールですわお姉様!」なんて下級生に慕われている(本人は知らない)先輩が、ああも分かりやすく笑顔を浮かべ

ているなんて、よっぽど腹に据えかねる事でもあったのだろう。

基本物静かな先輩があそこまで過剰に演技する時は、大抵静かに怒っている時である。

ああいう時の先輩には近づいてはならないのがお約束であるので、こつそり離れようとしたのだが、

「あれ？」

偶々男に振り返った時に視界に入ったのだろう、先輩がこちらに向き直った。

「奇遇だな、こんなところで」

「そ、そうですね、先輩」

「なんだ、知り合いか？ このガキ」

「ああ、私の学校の後輩。ちよつと待っててもらっていいかな？」

「ちつ、早くしろよ？」

そんな会話をしつつ、先輩がこちらに来て耳元で囁く。

「分かっていると思うがこの事、誰にも言うなよ？」

「勿論です。また一つ武勇伝が増えそうな気がしますが誰にも言いません」

「……もしかして、時々ばれてない筈の話が皆に出回っているの、お前の所為か？」

「いいえ！ 滅相もございません!!」

俺の言葉に、訝しげな視線を突き刺してくる先輩だった。

実は面白がって話したことが何度かあるのだが、もうそういう事は出来なさそうである。

「……まあいい。もし今後、そういう事があつたら真つ先にお前を疑う事にするよ。だからな、分かるな？」

「イエス、マム！」

よろしい、と最後にそう言つて先輩は俺から離れた。

色々と怖い先輩である。

そしてチンピラに冥福を。

投身日和

「……死のう」

ぽつりと、彼女は呟いた。

学校の屋上、その縁に彼女は立っていた。

今日は綺麗な青空が広がる風のない日、だから絶好の投身日和ではないかと、唐突に思ったからだ。

勿論、ちゃんとした理由も、あることにはある。

所謂いじめ、という奴だ。

文学少女で口下手で地味な彼女は、入学して早々性質の悪い同級生に目を付けられた。

同い年だというのに、彼女には考えられない程派手な格好をした数名の女子グループから大小様々な苦痛を味あわされた。

巧まないいじめ方をするので当事者以外には分からない方法ばかりで、しかも誰かに相談する事すら封じられる手段も取られてきた。

彼女自身が呆れる程の、絵に描いたようないじめの図式だった。

先程も、他に誰もいない屋上で殴る蹴る等の暴行を受けたばかりである。

今までの事を考えれば、客観的に見れば彼女は追い詰められており、主観的にもそろそろ限界かなと、冷めきっていた心がどこか遠い出来事のように、自分を察していた。

「あーあ」

こんな筈じゃなかったのに。

最後に少しだけ世界を呪う。

……別に多くを望んだ訳じゃない。ただ当たり前の日常（幸せ）があればそれで良かったのに。私が何かしたのだろうか？

とはいえ、『いじめは悪い事だが、いじめられる方も悪い』なんて暴言がまかり通る事が往々にしてあるのが今のご時世だ。

昔はそこまでは思っていなかったが、被害者にとつて理不尽な暴言だなど当事者になってから実感するのだから、世の中分らない。

……いや、いじめられるのは兎も角、ふらつと自殺をしようとする

まで事態を放っておいた私も、悪いと言えば悪いのかな？

いや待って待って、それじゃ部外者の慈悲のない意見と一緒だぞ、と思うが、ま、もう死ぬんだし関係ないか、と逃避とも言える結論を出す。そんな風に静かに思考が堂々巡りをしそうなところで彼女は首を振り、頭の中を空っぽにする。

そして気を取り直して、彼女は何もない空間に一步を踏み出す。

「それじゃあ、さような——」

「なんだ、自殺か？」

耳に届いた声に、身を投げ出しそうだった身体が硬直する。

一秒、それだけで全身から汗が吹き出し、二秒で体温が急上昇したのを悟り、三秒で漸く背後に振り向く。

そこにいたのは、彼女と同じ制服に身を包んだ少女だ。

ネクタイの色から同じ学年というのが分かる。だが、彼女より長身の少女とは直接の面識はない。

しかし彼女は一方的にはあるが、自分に声をかけた人物の事を知っていた。

確か入学したばかりの頃に学校内で起こった事件に関わって以来、何かと話題に困らない有名人だったからだ。

そんな存在が、重ねて彼女に問う。自殺か？ と。

「だったら何？ 放っておいて。貴女には関係ないでしょ？」

その言葉を受けて、少女は「確かに」と、一言。

そういう割にはこちらに近づき、柵を乗り越えて彼女の傍に立つ。

「引き留める気？」

「一応は。とはいえ、そちらもやめる気はないんだろう？」

「ええ」

そうか、と一言だけ言って少女はこちらへの視線を外し、ここから見える景色を眺め始めた。

特に変哲もない光景だ。

住宅街のど真ん中の、普段より視点が高い事を除けば、どこにでもある景色である。

「……………」

お互い何も喋らず、沈黙だけが続いていく。

その微妙な空気に彼女が痺れを切らし、何か言葉を発しようとした時、件の同級生が彼女より先に喋り出した。

「私も、飛んでみるかな」

「へっ?」

あまりにも予想外の言葉に、変な反応になった。

普通なら自殺をやめさせる為に、色々とこちらに語りかけてくるだろうと思っていたのだから。

「なんというか、絶好の投身日和だなと思つて」

「……………」

まさか自分と全く違う筈の人間が、自分と全く同じ感想を抱くなんて。

彼女にはそれがとても信じられるようなものでは到底思えなく、しかし、ああ、彼女も私と同じなのか、とそんな感想を抱いた。

……この人にも、私のように誰にも言えないようなものがあるのだろうか?

勿論、飛び降りてみたくなるような理由が本当にあるかは分からない。

だけど自分と全く違う人と、この時この場所で、本当に同じ想いを抱いたのであれば、もしかしたらちよつとは救われたのだろうか。

そんな事を思っていたら、眼前の同級生は不可思議な事を要求してきた。

「ちよつと、手を頭の後ろで組んでくれないか?」

「?」

いきなりの頼み事に訝しむが、何度も催促されたので仕方なく言う通りにする。

すると、

「それじゃ行っていい」

「え?」

くるりと身体を校舎側に回転させられて、そのまま胸を突かれた。悲鳴を上げる暇もなかった。

心の準備すら間に合わず、彼女は少女に突き落とされた。唐突な浮遊感覚に思わず目をつぶる。身体が委縮する。

そして何かに突っ込むような感触と背中側からの痛み、

「かはっー」

最後に強い衝撃を背中を中心とした身体全体で味わった。

突然の事に頭は既に疑問符で一杯だ。一体何がどうなっている。

更に彼女のすぐ近くに、彼女と同じように下手人が落ちてきた。

「ぐっー」

落ちてきた少女はそのまま大の字に転がってそのまま動かなくなっ

た。彼女が抗議しても反応がないので、仕方なく自分も同じように大の字になる。

そうして真上を見ると、そこには一部枝葉の密度が極端に薄くなっ

た木が目に入った。

更に背中には柔らかい土の感触が。どうやら木に突っ込んで勢いを殺した上に、花壇の柔らかい土が

クツシヨンになったおかげで、命拾いをしたらしい。そして空いた枝葉の向こうには、さっきまでいた屋上と、その向こうの青空が目映る。

……私、あそこから落ちたんだ。

「あは、あはは」

自然と笑いが込み上げてきた。

なんなんだろうか。突発的に死のうと思っただら声をかけられ、引き留められるのかと身構えたら何故か突き落とされて、でも死なずにまだ生きている。全く以て訳が分からなかった。意味不明すぎて笑う事しか出来ないではないか。

「二回死んでみて、どうだった？」

「……………最高よ」

それ以外になかった。

なんというか、色々なしがらみから解放された気がする。

余計なものが全部剥ぎ取られて、スッキリした。

頭の中にあつた靄が払われたようだ。

文字通り生まれ変わった気分だ。

「けど、なんでこんなことしたの？」

一種の爽快感に身を委ねながらも、やはりそれがどうしても気になつた。

多分、初めてまともに会話する自分に対する悪意どころ善意すらないだろうに、何故自殺志願者を突き落すようなことが出来たのだろうか。

今、頭の中にあるのはその疑問だけだつた。

「別に。突き落として本当に死ぬかどうかはどうでも良かったんだ。

一応死なないだろうとは予測していたけど。ただ——」

「ただ？」

少しの沈黙。その間にこの人は何を考えていたのか。

「——ただ、もし死んだり大怪我をしたりしても、私の所為にできるだろうか？」

なんて事を、言うのだろうか。

「世界を呪いながら、自分を否定しながら。自殺というのは大なり小なりそう思いながらするものだろう？ それじゃ悲しすぎると思つたから。それだつたら私一人が恨まれても、別に良いかなつて」

馬鹿な話だつた。どうしようもなく馬鹿な話だつた。

その理屈で言えば、態々背負う必要のない事を自分から背負いに来たと、そう言っているのだ、彼女は。

「なんで、そんな事を」

「なんとなくさ、なんとなく。これ以上は聞かれても答えられない」

なんとなくでここまでするという事は、もうそれはそういう生き方しかできないという事ではないだろうか。

そんな生き方、それこそ自殺志願者と変わらないのではと思うが、その思いを口にする事はなかった。

何故なら、それで救われた身でそんな事、言える訳がないからだ。

だから代わりに、

「まあ良いわ。取り敢えずここは、お礼を言っておくべきなのかな？」

「さあ？ それで気が済むならそれで良いと思うが」

どうやら助けた本人は、お礼を言われ慣れていないみたいだった。だっただらと、彼女は言うのだ。それこそ相手が困惑するくらいの気持ちを含めて。

「そう。それじゃ、——ありがとう」

超能力少年、受難の始まり

彼は超能力者である。

分類でいえば念動力やサイコキネシス等と呼ばれる能力を持っていた。

但し出来る事と言えば、スイッチを入れる、掌大の物を動かせる、程度の事でしかないが。

大した使い道も見いだせず、今も気まぐれに授業中に周りから見えないように、ペンを動かして板書するくらいしかなかった。

十歳くらいの時にある日突然発現したその力は、彼を大いに喜ばしたが、七年程経った今でも殆ど成長もせず、彼を落胆させた。

ただ効果範囲は数十メートルにおよび、特訓の成果で板書できるくらいには精密に動かせるが。

ただこれを使って何かを成す気もないので、現状、あるとちよつと便利な能力でしかなかった。

そんな、人とは少し違うが、退屈で変わり映えのない日々を過ごしていたこの少年に、転機が訪れた。

ある日の放課後、教室から誰もいなくなるまで眠りこけていた少年は、起き抜けに辺りを見渡して現状を把握し、

「寝すぎたー！」

と眠気覚ましに叫びつつ帰り支度を開始した。

夕焼けで茜色に染め上げられた、人気のない廊下を歩く少年。

誰もいないことをいい事に、自転車の鍵を超能力でくるくる回して遊びながらだ。

と、

「あなた。……それ、超能力？」

突如背後から声をかけられた。

咄嗟に超能力を解除して鍵を手に取りつつ振り向いて言い訳する。

「な、何の事かな？ 見間違いじゃないか？」

そしてそこにいたのは、この学校のととは別の制服を着た少女だった。

竹刀袋を持っているせいとか、私の強そうな雰囲気を出しており、中々どうして面倒くさい事態になってきたと、少年は辟易する。

「どうどう見つけたわよ……!」

「はい?」

剣呑な雰囲気濃くしつつ、目の前の少女は竹刀袋から中身を取り出す。

取り出し竹刀を斜め下に構え、こちらに斬りこんできそうな態勢をとると、その手に持つ竹刀に変化が現れた。

握った部分から光が放たれ、竹刀全体を包み込んだと思ったら別のものに変化した。

真剣だ。

テレビや社会見学で行った博物館くらいでしか見たことのないソレ。

夕日の光に照らされるその輝きは、十二分に本物の気配を漂わせた。

こちらを殺傷するに足るものであるという事だ。

「いやいやいやいや! 何物騒なもん取り出してんだ!? 人違いです俺は悪くありません!!」

竹刀が真剣に変化した事については、驚愕に値するが人の事も言えないので置いておくとして、襲われるような事は何もしてない筈なので、必死に捲し立てる。

「問答無用! 観念しなさい!」

「うおおおお、あつぶねえ!?!」

こちらに突撃してきた少女による、刀の一撃を無様な格好でギリギリ回避し、そのまま逃走する。

これが彼の、受難の日々の始まりであった。

彼女の平常運転（仮）

授業中、人気のない部室棟、その文芸部部室。

そこは悪ぶりたい子供にとって格好のたまり場だった。

「ぶはー、だつりいー」

一人が煙草の煙を吐き出しながら言うと、

「だよなー。なんか面白い事ねえかな」

「そう言うなよ。真面目に授業受けるよか、ここで駄弁つてた方がマシだろ？」

「そうだけどよー」

彼らは毎日こうして、ダラダラしながら漫画やゲームを持ち込んで遊び耽っていた。

三人はこう見えて、文芸部に所属している部員である。

とはいえ、何時でもサボれて好き勝手出来る部室が手に入るから所属しているにすぎないが。

勿論彼らの他にもまともな部員は何人かいるが、恐れをなして何も言えない状態である。

「そーいやよ、今年から保健のセンサー変わったんだってな？」

「へー、そーなん」

「ああ、前のババアが定年だつふうんで、代わりに若いのが来たんだと」

「期待すんなよ。どうせブスなんだろう？」

「見たことないからわっかんねー」

各々が寛いでいる時に、一人がふと出した話題。

思春期の少年には気になる話題ではあるが、現実はその甘いものではない。もう一人が、切つて捨てる。

だが、

「……いや、それがそうでもないだよ」

最後の一人が発した言葉に、空気が俄かに色めき立つ。

「いやな、俺も遠くからちらつと見ただけなんだが、それでも分かるくらいに美人オーラ？　みたいな纏ってんだよ」

「へえ、そうなんか。そう言われるとなんか気になるな」

「ちよつと見に行つてみね？ どうせ暇なんだしよ」

「そうだな。どうせ保健室にでもいんだろ」

彼らは丁度良い暇潰しになると、腰を上げる。

それぞれ口にはしないが、そんなに美人であるなら役得な事にでもならないかと、秘かに期待していた。

それが表情に出っていたのだろう。三人はお互いの顔を見て、下卑た笑みを浮かべる。

だが、次の瞬間には凍り付くことになった。

「——その必要はないぞ」

何故なら部室の扉が開くと共に、女性の声が響いたからだ。

「うおお!？」

一斉に扉の方に振り向く。

そこにいたのは妙齢の女性だ。

まず目に付いたのは白衣。そしてその白とは対照的な黒い髪。かなり精悍な顔つきで不良生徒達を見渡す彼女は言葉を発した。

「私とその養護教諭だ。……サボりな上にタバコか。立場上、見過ごす訳にはいかんな」

彼女は近づきながらそう言つて、一番近い所で吸っていた少年からタバコを取り上げる。

「なっ!?! 何しやがるテメエ!」

「何って、没収だ没収。酒やタバコは二十歳になってからだ。ほら、お前達も出せ」

そう言つて養護教諭はタバコを寄越せと、手招きする。

しかし当然、三人は素直に従う筈もなく、

「はあ? 誰がんな事聞かよ。馬鹿じゃねえのか?」

と、聞く耳を一切持たなかった。

その返答を聞いて、彼女は動きを止めた。

少しの沈黙。そしてその後、酷くつまらなさそうな顔をしながら、言葉を放つ。

「……今素直に出して成人するまでは二度と吸わないと誓つて真面目

に授業を受けて生活態度を改める、というなら学校や親には黙っておいてやる」

彼女が言い切った後、再び部屋に沈黙が下りる。

それは、言われた彼らがその意味を理解するまでの時間だ。そして理解して直後に大笑いを上げた。

「ぶははははは！ 何言ってるんだアンタ？ どれだけ俺らの事舐めてんだよ？」

「そうだな。……大した事もできない癖に変に悪ぶって、こんな誰も見てないところでタバコ吸うしか能のないクソガキ？」

——三度、文芸部部室に沈黙が訪れた。

そして次の瞬間には、その反動か、少年三人が彼女に襲い掛かった。怒声を上げて殴り掛かる三人。

しかし養護教諭は一切臆する事もなく、無言のまま淡々と、しかし的確に攻撃を捌いていった。

それは素人目からしても荒事に慣れていて、といった風だった。もしその光景を客観的に見る者がいたのなら、まるで予め決められた動きをする演武でも見ているような気分になっただろう。

時間にして十秒にも満たない間に、全ては決着していた。

自分の攻撃が避けられたと思っただ次の瞬間には、衝撃や痛みと共に地に伏していた三人は、呆気にとられた目で相手を見上げた。

「自分の意に添わなければすぐに暴力か。全く、程度が知れるぞ？」
そこには何でもない風に手を払う、養護教諭の姿があった。

「大体年齢的に吸ってはいけないのもそうだが、吸うにしても他人の迷惑を考えろというんだ。吸ってはいけない所では吸わない。他人に煙がかからないように配慮する。灰や吸い殻はちゃんと処理する。これらが出来なければ、いくら格好つけようとしても無駄だぞ。はつきり言ってダサイ。格好良く吸いたければ気配りのできる大人にならないと駄目だぞ？ そもそも健康面で言えばだな……」

そして唐突に始まった説教は、その後暫く続くことになった。

不良生徒三人は辟易しながらそれを強制的に聞かされ、タバコやライターを没収された上に、文芸部部室を掃除させられた後に退去させ

られる事になった。

文芸部部員としても除名させられたが、これを切っ掛けに彼らが更生するかどうかはまた別の話である。

「…………ふう」

静かになつた文芸室。

そこに一人残つた養護教諭は、漸く問題が一つ片付いたかな、と一息ついた。

今回の事は彼ら三人以外の文芸部部員から頼まれた事だったのだ。不良三人をどうにかしてほしいと。

このままでは碌に入部希望者を探す事もできないと、相談を受けたのがつい先日の話だ。

「しかし久しぶりに喧嘩の真似事なんてしたが、あれくらいならどうにかなるものだな」

彼女は昔からトラブルに引き寄せられる人生を送っており、暴力が必要な揉め事にもよく遭遇していたのだ。

だから先程の事は、彼女にとって軽い運動といった風にどうとでもできたのであった。

そんな養護教諭は、壁際に設置されていた、図書室のような簡易的な業務ラックではない立派な本棚へと近づき、中身を吟味する。

純文学、恋愛、ファンタジー、SF、ミステリー等々、各ジャンルの有名どころは抑えてあり、ここ数年で話題になったものもいくつか見受けられた。中高生に人気のライトノベル等もいくつか揃っており、中々に退屈しなそうなラインナップだ。

そこでふと、彼女はあるものを見つけた。

本棚の横に置かれた事務所等に置かれている業務用ラック、中が透けて見えるガラス張りの棚の中に、文芸誌を発見したので。

文芸部が文化祭で毎年発行している部活動の成果だ。所謂コピー本と呼ばれるものだが、本の厚みは一冊でもそれなりにあり、十年分もまとめれば結構な分量があった。

その中の一冊を手にする。

いくつか紙を捲り、とあるページを開く。

「懐かしいな」

言葉と共に、思わず顔がほころんだ。

開かれたページの作品の作者名、そこには彼女の名前が載っていた。

そう、彼女はこの学校の卒業生であり、元文芸部の部員だったのだ。あまり部室に顔を出すタイプではなかったが、それでも在籍中は毎年文芸誌に寄稿したり、ほかの部員とも仲良くしていたりしていたので、この場所にはそれなりに愛着があったのだ。

だから、現在の文芸部の頼みを聞いたし、馬鹿共を追っ払いもしたのだ。

文芸誌を開きながら近くの椅子に座り、中身を読んでいく。

そして放課後になるまで、静かな時は続いた。

新しい文芸部顧問の思い出と共に。